

## 近代日本文学にあらわれた僧侶像（八）

見 理 文 周

### 二十

今まで眺めてきた僧侶たちは、主に仏教の習俗の中で、その容姿や言動が外面的に描かれていた。が、ここに、僧侶を内的な存在として、抽象的に、あるいは象徴的に描いている作品があるので、取上げてみることにしたい。一つは、斯波四郎の『山塔』（昭34）で、もう一つは、吉田知子の『無明長夜』（昭45）であるが、共に芥川賞作品として、それぞれ第四十一回と第六十三回の受賞をしている。

まず『山塔』に登場する僧侶は、慈海寺の老師であるが、名前も年齢も具体的な容貌の特徴も記されていない。要するに〈老師〉という禅僧であって、何も説明する必要のない——ということとは、完成された、悟達の、象徴的な、ということであろう——存在として、主人公の心域に君臨しているらしく思われる。作品の中に登場する場面はほんの少ししかないが、主人公の思考領域を占める部分はきわめて大きく、最終的に

は、その決断を促し、決定を裁定する存在となっている。

主人公の山陰素吉は、中年の銀行員で、一月前まで東京で瀕死の病院生活をしていた。少年のころ、父がこの町の峡谷で墜落死し、その後ずっと異郷の町を転々として、成長してからも首都に住んで帰郷したのは二度きり——高校生のときと母が死んだ大学生のとき——だけだった。それが死の貌をみたとき、喪われた郷里というものが、生涯の大切な落丁部分として意識され、生命の欠損部分を癒すためにはそれを再構成しなければならぬという、深い祈りとなり、傷痕の発現となって、素吉の内部から現われてきたのである。さらに言えば、胎内にいたときの記憶、本能的な郷愁をさがしだして、それで自分の原像をかたちづくり、原風景を確かめたい、と思ったのであった。作者は別のところで、「故郷というのは、生れ在所という意味でなく、ひとのおのの胸のなかにある個我的住むところ」と述べているから、〈故郷〉もまた象徴化されて考えられているのである。

かくして主人公の山陰素吉は、この湖底のような町の、慈海寺の「老

師が世話してくれた潭北院の離れにおちつき、傷ついた獣みたいにして、境内や附近の風景のなかを歩きまわる。こうして無為に一生がおくれるものなら、慈海寺の寺男になってもいい、と考えたり、自分の墓碑を立てるならどこにしよう、などと考えたりする。とくに素吉は、慈海寺の庭園を造った岩四郎という山水河原者を自分の先祖として、その経歴を探ったり、その庭の美学や哲学を考察したりする。つまり、自分の存在の原点を確かめることで、喪われたものを恢復しようとするのである。

ところで慈海寺の「老師」には、静子という娘がおり、素吉が高等学校のころには、彼が連れて歩いたあどけない童女だったが、今は五人目の夫を養子に迎えて、高校生と中学生の兄弟、小学生の姉妹、それに赤ん坊を育てている。現在の、五番目の年若い夫は絵の先生で、日展に何回か入選しており、画家として東京で暮らすことを、ひそかに願っている。赤ん坊だけが彼の血をうけた子供で、あとは他人の血の流れている子供であって、自分の焦立ちのために折檻したりする。彼は、古ぼけた慈海寺の五人目の養子として、責任を負わされ、押し潰されようとする運命を悔い、逃げ出そうにも逃げ出せない自分に憤懣をつのらせているのだ。つまり、故郷に回帰しようとする主人公の素吉と対比的に、故郷を脱出しようとする人物として、静子の夫は設定されている。

ところが素吉は、そうした生活を送っているうちに、ふと、樹林のなかで静子と心を通わせ、男女の関係を結んでしまう。彼女を狙う墓石屋への危惧の念や、二人の密会を盗み見た息子へのおのきなどが、かえ

って愛欲を激しくつものらせる。清澄な魂の浄化の場であった筈の故郷が、いつしか、「蒸された人間関係」の場になっているのである。

慈海寺での一夜、素吉は「老師」と静子の夫の晁先生とで酒盃を重ねる。素吉は問責の座にすわることを覚悟し、「老師」の憤怒の爆発を待つ。晁先生は田舎ぐらしをこぼし、素吉は久しぶりに帰ってきた故郷の懐しさを語る。だが晁先生は、素吉の感想を感傷だと言い、贅沢人の夢だと批判する。素吉は庭を話題にし、「老師」が皺だらけの顔を綻ばせてうなずくを見て、心から嬉しく思う。

すると晁先生は、こんどは「老師」にからみはじめ。『若だらけの庭なんか有難がつて、あねいなもんを守っているから、みんなが不幸になります。たたき壊さんとだめです。和尚さん、ちがいますか』。名山や名河が見たければ現地へ行けばいいので、なにも狭い庭に真似ごとをすることはない。まして頭でひねくりだした浄土莊嚴の庭園など、うわごとだろう、と言うのである。『観念ごとや言葉をひねくりまわす都会のやつらの腐った了間で、わしらの苦しさはわかりはせんです。遊びごとと真剣な暮らしと一緒にあります。晁先生は、そういつて席を立つ。『老師』は、焦慮する養子を気の毒そうに眺め、『荷が重すぎたか。あれの方が面白いです』と呟く。そして、庭よりも『裏の山塔をみなす』。枯山水の庭よりも昔からあって、山水河原者の岩四郎も、遊歴のすえにここで山塔の声を聞いて住みついた、というのである。

「老師」は、いかにも美味しそうに盃を乾し、それを静かに置いて、

突然つぶやく。

『山塔の声とはなんの意ぞ』

低い声だが臓腑にしみとおろ、素吉と静子は、はっとして「老師」を見る。沈黙が胸にこたえる。並び坐った二人に、「老師」はじいっと眼を注ぐ。なにもかも見透しの眼の色である。皺だらけの柔和な老顔に憐憫の色が流れ、無量の時が音立てて流れるのを素吉はおぼえる。と、ふたたび、「老師」の声が二人の頭上に響く。

『山塔の声とはなんの意ぞ』

素吉が調べてみると、「山塔」とは裏の崖下の庭にある、ひよろひよろとして今にも倒れそうな六尺ほどの岩の塔である。蟻塚のようなその自然の塔からは、「老師」の言う声などきこえそうもない。しかし、その山塔の声が解り、「老師」の言葉の真意が判れば、すべてが解り、素吉の生涯が決定するかもしれないのだ。素吉は、子供の反抗が日々に激しくなり、静子と晁先生の争いが表面化してくるなかで、苦痛をしのびながらも、あえて山塔の声を聴こうとして昼となく夜となく塔の前に立つ。——そして、ある夜、素吉は夢の中で山塔の声を聴くのである。

「老師」の言う「山塔」の声とは何であったのか。蒼天高く突き入ろうとして競いたつ連山を見て、今まで安らかに眠っていた小丘が、ある歳、ふと『わたしはなんであろう』という疑問を抱き、愕然とする。群山がみな背のびして一日一日と高みに聳えあっているのに、自分だけ是他愛なくまどろみ呆けており、年々歳々、風雨によって削られ、このま

までは消滅するのもしして遠くはないように思われて慄然としたのである。

七百年経ったある夜、小丘は、『高きを欲するなら小丘、高きことを自ら意志せよ』という神の声をきく。だが、意志を樹立することの至難のために、一千年の狂乱と錯乱の日々を送る。

また、数千年の氷河期を経て、『高きを欲する小丘よ、高きを欲するならわが肉身を削れ』という、神のような威厳をもった自分自身の声に驚く。その夜から、小丘はわが贅肉をふるいおとすために全力をあげ、数千年の嵐を経て孤影悄然と痩せ細る。が、背丈まですりへらして枯死した樹木のようになったわが身を恥じて、小丘は絶望する。絶望のはてには死しかなく、執念に破れたものの敗北を認める道として、千仞の谷に身を投げようとする。そして、群山が美しく凛々しく聳える前で身を浄めると、かえって、その覚悟をきめたことで心が清々しくなる。が、そのとき、また厳肅な声をきいて襟を正すのである。

『高きを欲し、高きにいたった。その刹那に絶望するとはなんぞ、身を削れ。微塵の附加物を洗いおとせ』

その日から七百八十八夜があけた朝、端然とした小丘は、静かな声で『山塔よ、自ら高きを欲して、その頂点にきた山塔よ。自らの高きに迷いを生じた日は自らの脚下をみよ。脚下に伏して自らを仰げ』というものの声を耳にする。『あれらの名山、峻嶺が、どんなに高く聳えていようと、それはお前には関係がないことだ。羨望嫉視の眼をキョロつかすな。お前はお前に与えられた力で、いまになった。彼らはお前には与

えられていない力によって聳えているのだ。彼らも、また、絶望による自らの力によって聳えたことを忘れてはならない』

小丘は、自分の脚下に導かれて、おずおずと山塔を見仰ぐ。すると塔は、たちまち背伸びして老杉をこえ、はるかに蒼穹に突き入って、また元の位置に戻される。幻覚である。——そこで素吉は目をさます。

つまり、「老師」の説こうとするところは、素吉の見たこの小丘の夢によって語られており、擬人法の形で求道的な説話がなされるところに、この作品のきわめて個性的な手法が認められるのである。そして、自己回帰の原点を「老師」の示す山塔においているところに、仏教的な求道に通じるものがあり、〈自己探求と断念〉という、作品のテーマを特色づけていると言えよう。

一方、『無明長夜』に登場する僧侶は、「御本山」の「新院」であるが、この僧侶にも、前作同様に名前も年齢も具体的な容貌などの記述はなく、前作以上に抽象的な描かれ方をしている。この作品は、「私」という女性の独白体で語られているが、初めから終りまで一貫して、「私」の心中の関心や憧れや信頼の対象として「新院」は存在している。しかし物語り自体は、決して「私」と「新院」の相関関係だけを語っているのではなくて、むしろ「私」の身边雑事が、過去の回想と現実の行動をないまぜながら、心象風景的に述べられている。プロット（筋）の構成が順序立った因果関係による説明でないところに、作品としての新しさがあり、微妙な味わいがあるといえる。が、その筋の奥に一本、通され

ている線が、「私」の「新院」への意識なのである。

この「新院」（あるいはかれ）という僧侶を眺めてみる前に、どうしても理解しておかなければならないのは「御本山」で、「私」にとって、それは「お寺ではないのです。それはひとつの確固とした不動のもの、不変真如<sup>しんじょ</sup>でした。他のどんなものとも何のかかわりあいもなしに、そこに存在しているものでした。物心がついてからいままでの二十数年、私はずっと心の底のどこかで御本山を意識して生きてきました。それがそこにあるということを片時も忘れたことはありません。……」という存在である。

「私」が初めて、「御本山」のある門前町に来たのは、多分、二歳か三歳ぐらいの時で、そこは雲州鉄道門前線という軽便の終着駅にある。父の応召後、母と二人でそこに疎開したのである。しかし、父が戦死し、戦争が終って他の疎開者がみな町へ戻っても、二人はそこに留まり、母は役場の小使をし、「私」はその辺のお稲荷さんや役場のポーチなどを遊び場にして、幼女期を送る。小学校に入ってから初めて「御本山」へ登り、奥の院まで一万坪の非常に大きな境内を魅力的な遊び場として、毎日をすごす。

ところが、八歳のときに何気なく「新院」を見てから、「私」の内部で「御本山」は価値転換して、遊び場ではなくなったのである。本堂の縁の下で土をいじっていた「私」は、縁の上に現われた「新院」を眼にしたことで、内部世界を変えられてしまったのだ。

「新院」は、「ごくあたりまえのお坊さん」であった。「特別に若くも

ないし、老人ということもなく、背も肥りかたも普通」だった。だのに、彼と彼の歩き方には、「ひとつの確かなもの」があったのだ。どんな時でも、「あの人は何をするのにも迷うことはあるまい」と思われ、その曖昧なところのない「確かさ」は「御本山」と同じであり、「他のどんなものとも異質のものだ」と感じられたのであった。

その後、「私」は二十五歳のときに「軽々しく無造作に」結婚をするが、三年たっても子供の生まれる兆しはなく、夫が出張先から行方不明になったと聞いたとき、「御本山」が急に心の中で厚みをもち、「ぐいと近くなったのが感じられ」、「御本山」にのぼらなければならぬと思う。夫が変質者だという噂を耳にしたのも結婚後だったが、出奔後に、それが計画的だったことや、彼が再婚であり、前の妻が原因不明の自殺をしていることが判る。

さて、このようにして「私」は、内部に一貫して定着したものとして「御本山」と「新院」を意識し、一日に最低二回はそれを思い、時には微動だにしない「確かさ」を憎み、それを無視しようとしながらも「御本山」の黒い森を眺めないわけにはいかない。「新院」は、「一歩一歩には正確でありながら、左右上下の圧迫を撥ね返している粘った力があり」、「のっぴきならぬ、それ以外であり得ようはずのない必然性を持っているが、そこには彼自身の、暴力的といってもよいほどの強い意志がある」存在として、「私」の胸中に生き続けるのである。

しかし、「新院」に初めて邂逅してから二十二年たった、ある雨の日に、「私」はかれ（新院）に再会したことから、それまで続いた精神状

態の均衡を破られる。かれは丸刈り頭で着物を着ていたが、僧形ではなかった。「僧にも百姓にも見えず、何をしている人か見当のつかぬ恰好」で、「激しい雨の中を平然と顔をあげて歩いてき」、「私」の横を通りすぎる。「晴れでも雨でも嵐でも、それらに少しも影響されない確信に満ちた一定の歩幅」の歩き方で、その男がかれだと「私」は理解する。「私」はその時、「周囲の景色がいままでと全くちがう色に変わったような気がした」のである。

その後、「私」はいろんな所で、二十年間行方不明だった男——かれの噂を村人たちから聴く。千台寺という寺の長男で、住職になるはずだったのに「御本山」で修業中に出奔し、以来二十余年間をどこで何をしてきたのか、誰も知らないという。現在は、弟の継ぐ千台寺の「新院」という小さな坐禅堂で、机一つ、煎餅蒲団一組、茶碗一つ、着物一枚の生活をしているというのだ。「私」は、それがかれだと知りながらも、別の男のような気もし、千台寺の前まで行つては、散歩だ、と自分に言いきかせたりして、また不意に一種の戦慄が体を突き抜けたりする。

「私」は、夫の吉彦が精神病院にいたのではないかという姑の報せで、病院と婚家を訪れ、それが不確実な話であったことを確かめて帰ると気持ちに区切りがつく。それで一日おきぐらいに「御本山」の青池を散策し、ある夜、ついに「新院」を訪れる。かれは眼鏡をかけて本を読んでおり、「私」が部屋の中に入ると、「蛇が鎌首を持ちあげるような具合にすつと首を伸ばし、まっすぐに私を見る。『まだ若いじゃないか。若いのに』と、かれは天井を見ながら言う。

かれの喋り方や態度を、「私」は若々しすぎると思う。半白の五分刈りの頭だが、顔色は桃色で光沢があり、本を読む姿勢からも精力的で挑みかかってくるものを感じる。が、「よく見ると、顔には老人らしい薄い赤斑が諸処にあるし、頸の骨は肉が落ちてとがっているのに胴体は不恰好にふくらんでい」て、「氣力を別にすれば彼はまぎれもない老人」なのである。「彼は、いずれ死ぬ」と「私」は思う。自分にとっては「不確実であやふやな死が、彼の場合は確実なものとして、ある」のだ。「私」はかれの骨のことを想う。

かれは、『骨って、きれいですか』という質問に答えて言う。『子供の骨は脆い。すぐに崩れて粉になる。おとなの骨は穢ない。この世に未練があるから。……』。未練のない人もいるだろう、と訊くと、『同じです。みんな同じだ。未練のない人なんていない。自分ではないと思っても、体のほうは、まだまだ未練や執着があるんだ、この世に。……』と答える。

その後、「私」は道で何回かかれに逢うが、いつも同じ歩きかたをしているのに、「貧相な老人」に見えることがある。「腹のへんのふくらみ加減が、いかにも野暮ったく、腹巻か胴巻を厚く巻いているような感じの日もある」。「歩きながら空咳からせきをしていること」もある。確かな歩行と思っていたのも、「単に他の人より少し大股おおまたで、少し歩くのが速いだけかとも思う。それが実体だと思うと失望する。が、かれとすれちがって十分もすると、「やはり、あそこに何かがある」と思うのである。

ここでは、「私」の「新院」にたいする意識の動きだけを抜き書きし

ているので、「私」の精神が次第に狂気に傾きゆがんでゆく作品の味わいを、伝えることはできない。しかし、そうした状況の中で、当然、「新院」に対する「私」の精神の位相も微妙に移っていくわけで、そのために〈僧侶像〉を明確に分析したり造型したりできないもどかしさを感じる。

が、作品が2/3ほど経過したところで、「新院」のイメージはかなり明確になってくる。たとえば、『無意味無益だ』という、かれの言葉が「私」の内奥へ達し、ようやく激しく叱責されたという気持で、むしろ嬉しくなる。「新院」は、ある商店主の坐禅をさして「単なる自己満足にすぎ」ず、「無意味無益」だと呪文じゅもんのように唱えたのである。さらに彼は、何にでも上手下手があると話し、『坐禅にもある。信心にもある。……無器用な人間は、見苦しいだけだ』と言うのである。それは商店主に向けられたというよりも、「新院」自身を刺す言葉として、語調の苦さときびしさをもっていたのである。

そこで「私」が、『下手な人はどうすればいいのですか。一生下手のままなのですか』と尋ねると、「新院」は答えずに、おそろしく速い足で歩いてゆく。

小走りについて歩きながら、「私」が喘あえぎながら彼が二十年間も村を留守にしたわけを訊き、人殺しをして刑務所に入っていたという村人たちの噂をただと、かれは軽々しく、あっさりと答える。

『人殺しなんて簡単なことだ。死ぬこともそうだ。そうして、死ねばそれきりだ。そうだろう』

それで「私」が、あなたには極楽浄土はないのかと問いかえすと、『極楽浄土は、あります。あるべきだ。死ぬんだからね。誰でも……死ぬのは仏のみころなんだ。どんな死にかただろうと。だから、極楽浄土は、ある』と言う。『死ぬのも生きるのも、みころだと思う。しかし、何も期待してはいけない。悩み苦しみ、とんでもない方向へいこうとしていても……小さな子供が溺れ死のうとしていても……仏は見えていただけだ。仏にすれば、どれもこれも善いことなのだ。二十年前に、わしはそれを知ったんだ。黙って見ているものがある、ということ』

かれは、『本気にしてはいけないよ。わしの言うことはみんな嘘なんだ。坊主にもなれん男の言うことだ』と言い、ますます足を速め、到底追いつけない速度になって闇の中に去る。

「私」は、この男が本当に、「私と正反対の存在、不動のもの、迷うことのない人、二十年も私の内部に定着していたかれ」なのか、を疑う。今まで「御本山」のどこかにあった「大きな秤」が、一方に大きく揺れ、ぐらりと傾いたような気がする。必ずあるはずだと信じ続けてきたものが、「実は無い」のか。「初めから無かったのか」、「すべて誤解だったのか」。「錯覚から出発していた」のか。この時、「私」の今までの「黒い闇」が「白い闇」に変わる。……

つまり、「新院」は「私」にとって、「御本山の思想を体现した存在——不動のもの」であったのに、実際には「不動のもの」でも「迷わぬ人」でもなかったのである。

しかし、この「新院」という僧侶の描き方は、坐禅堂に住む禅僧かと

思うと極楽浄土のことを喋ったりして、立場が不鮮明であり、それを作者が意識して書いたのかどうか、判然としない。『無明長夜』という題名どおり、作中に登場するものをすべて意識的に狂わせ、そのゆがんだ存在や関係を描くことで、新しいスタイルの文学を指向したのであるかもしれない。が、作者がそこまで考えずに書いたのに、結果的には予期せぬ文学的效果をもたらした、と思われるふしも無いではないというのが、筆者の率直な感想である。

作品の終り近くで、「新院」は「私」に『わしは、あんたの父親じゃない』と、断定的な言葉を言いわたす。『もちろん、先生でもない。旦那でもない。他人だ』

かれは、「私」が長い間思いちがいをしており、『あんた自身についても思いちがいをしている』と言って、戸棚から数珠を出して渡す。「私」の母から渡してくれとあずかったものだと言う。かれは、回向してあげようと言って誦経し、終ると、『あんたには自分以外のものはないのだ』『自分だけなのだ。だから、どうしようもない。……』と言う。さらに、『帰って服を脱ぎなさい。それから湯で体を拭くんだね。風呂があれば沸かしたほうがいい。そうして、乾いた小ざっぱりした服に着替える……そういうふうなことをやっていればいいんだ、際限もなく。それだけなんだ』と、優しく言う。が、「私」は冷たいものを感じ、自己嫌悪をおぼえる。

「私」の中で炎が荒れ狂い、燃えあがり、ごうごうと音をたてて、「御

本山」の七堂伽藍が燃えあがり、その華れいな赤い炎のなかの荘嚴な建物の黒い梁が、一本ずつ燃え落ちたのは、その明け方である。けたたましい不吉な半鐘の音をききながら、「私」は忍び笑いをはじめ、やがて声をたててだらしなく、「生れて初めての笑い」声を上げる。「私」の体が楽になり、「私」を「人の形に貼りつけていた釘が一本ずつ抜け落ちていく」のである。「がたがたと形の無いものに崩れていく」のだ。

この「私」が狂気の中に落ち込んでゆく描写は、作品の筋のクライマックスとして、出来すぎるぐらい巧妙に設定されている。また、この作品に登場する「新院」以外の数人の人物やエピソードや場面も、それぞれに趣向がこらしてあって、「私」の病んだ精神の内面風景をうまく表現する役割を果たしている。が、「新院」という僧侶が「私」の内的存在として仰がれ、長く憧れられていたにしては、最後のところが、あまりにも平凡でつまらない気がする。それは初め抽象的な存在であった「新院」が、最後で具体的な容姿を現わし、何ら神秘的ではない、ただの男であったという結末のためであり、作者がこの〈僧侶像〉を完全に消化して造型することができなかったから、ではないかと思われる。

（未完）